

# 「周りへの思いやり」

「思いやり」は、相手に対する温かな思いを抱くにとどまらず、行動に移せるようになるまで高めたいものです。そのための、「自他の良さに気付く」「思いを伝え動き出す」「働き掛け支え合う」という、三つのステップを紹介します。「思いやり」を、学級・学校の文化にしてみませんか。

	<b>H o p</b> 【自他の良さに気付く】	<b>S t e p</b> 【思いを伝え動き出す】	<b>J u m p</b> 【働き掛け支え合う】
	学級を見回したとき、「思いやりがないな」と感じることはありませんか。そんなときは、子どもが自分の良さと友達の良さに「気付く」場をつくることに力を入れてみましょう。互いの良さを見つけ合い、認め合おうとする子どものまなざしは、思いやりの基盤となるものです。	次に、「気付く」から「伝え動き出す」へのステップアップです。「良いところ発見」によって、優しさの目、温かさの目で周りを見ようとする心が育っていますから、友達の困り感にも気付く下地ができています。困っている友達に声を掛けて思いを伝え、具体的に行動に表す自信と勇気を育みましょう。	いよいよ、「伝え動き出す」から「働き掛け支え合う」です。友達のために動き出す自信と勇気をもった子どもには、一人一人の困り感に合った、より適切な働き掛けの方法が学べる場で、実践力を磨きましょう。
教員の働きかけ	<b>良いところ発見</b> ①友達の良いところを見つけてカードに書かせるなど、良さを記録させる。 ②記録した内容を発表させたり、掲示させたりする。 ③高等学校では、発見した友達の良いところをショートホームルーム等で互いに報告させる。 ④学年や学校全体で「良いところ発見」の報告会を開く。	<b>居場所づくり</b> ①温かく肯定的なメッセージを送る機会を増やし、子どもが「自分は大切にされている」と思える集団をつくる。 ②子どもが相互に「聴く」活動を重視し、温かな聴き方づくりに取り組む。 ③授業の中で、「聴き合う」「認め合う」活動を意図的に設定する。 ④静岡県版「人間関係づくりプログラム」等をタイムリーに活用する。	<b>異集団との交流</b> ①学級が支え合う集団に高まっていることを意識付け、共有させる。 ②ペア清掃などの異学年交流、小学校・中学校間などの異種校間交流を行う。 ③部活動単位で、日常的に異学年の縦割り活動を行う。 ④地域の人たちと触れ合う機会を増やす。
指導のポイント	①良いところを見つけようとした子どもの温かさや、視点の素晴らしさ、積極性を大いにほめ、周りに広める。教員も、率先して子どもの良さを見付け伝える。 ②掲示する際、学級の子どもの知らせたい場合は教室に、学年全体に広げたい場合は廊下や学年掲示板に、全校に伝えたい場合は玄関や昇降口にと、目的によって掲示場所を変える。 ③誰にでも良いところがあることを伝え、友達の良さを見つけようとする雰囲気高める。 ④良さの質の向上を感じさせるため、報告会は定期的に開催すると効果的である。	①子どもの「弱みより強み」を、「能力より努力」を、「表出された声よりも心の声」を見取ったり聴き取ったりするよう心掛ける。ほめるときは、主語を「私」や「私たち」にしてほめ、子どもの自己存在感を高める。 ②「良い聴き方」についてみんなで考え、集団の目標をつくる。決まった聴き方を掲示し常に意識付ける。いろいろな教室に掲示すると、更に効果的である。 ③特に年度当初は、聴き合う場をできるだけ多くの時間に設け、聴くことの習慣化・日常化を図る。 ④静岡県版「人間関係づくりプログラム」は、小中学校版では「自己表現」のエクササイズを、高校生版では「いじめ・自殺防止対策としての人間関係づくり」を中心に行う。エクササイズ後の、感想を分かち合い思いを交流する時間を必ず設定する。	①ステップまでの取組によって高まったところを確認し合ったり、発表し合ったりする。集団の高まりを、子ども個々の高まりとしてフィードバックする。 ②異学年交流や異種校間交流をすでに行っている場合は、活動そのものが目的になってしまっていないかを見直す。例えば、下級生の困り感に上級生が接するとき、その子どもの主体的な判断があるか、周りの子どもはその価値ある一歩にどんな支えができていくかという視点で行う。 ③部活動内の当番を縦割りで組むなど、下級生が上級生の思いやりに触れる機会を意図的に設定する。 ④地域の人たちとの触れ合いを、学校で培った「思いやり」を広げる場、実践力を磨く積極的な場と位置付け、その子どもならではの働き掛けをほめる。
期待できる効果 (子どもの変容)	○最初のうちは目立つこと、自分が嬉しかったことに対する発見が多いが、回数を重ねるうちに、目立たない友達の良さや、集団を向上させるための努力に対する発見が見られるようになる。見方次第で、友達のいろいろな良さが見えてくることに気付く。 ○友達が発見した自分の良さに触れることで、自己有用感が高まる。友達の良いところに気付いた「自分の優しさや温かさ」も実感できる。 ○良いところを報告し合うことにより、良さに対する互いの価値観を共有することができ、自分のできそうな良い行いが見えてくる。	○個人の困り感を一人だけのものにせず、誰かのために動き出そうとした一人の勇気を支える集団ができる。 ○聴き上手な子どもを育てていくことで、発信しようとする子どもの思いが伝わりやすくなり、「自分を表現しよう」「進んで動き出そう」とする自信が湧く。 ○プログラムの実施により、思いはあってもその伝え方が分からない子どもに、具体的な言葉掛けのスキルと一歩踏み出す勇気が生まれる。	○あらゆる年齢の人のあらゆる困り感に、自分ならどんなことができるのかを考え、判断し、働き掛けていく力が育つ。 ○困っている人に手を貸して受け入れられたときや、「ありがとう」の一言をもらったときに、人とつながる喜びと、更なる自信が芽生える。 ○地域の中の学校の一員であるという意識が高まり、学校の外であっても、誰かが見ていなくても、自分の信念に支えられた良い行いが自然にできるようになる。